

第一章 再会

そこは見渡すかぎり青い空がどこまでも続いていった。

冷え込んだ朝が過ぎ、真上にある太陽からの柔らかな温かさがあたりを包み込む。

気がつくと、あれだけうるさいぐらい鳴いていた蝉の泣き声もなくなり、今聞こえてくるものは風がやさしく通り過ぎるたびに木々をさやさやと奏でるぐらいで、静かに時が流れていた。

ここは緑豊かな山から突き出た崖の上。

眼下には色づき始めた森が、まるで鮮やかな絨毯のように広がり、流れていく雲が、刻一刻とその模様を変化させていた。

その崖の上の平原に一人の少年がいる。

少し癖のあるはねた黒い髪、そして髪同様に黒い瞳をしている普通の少年なのだが、服

装は少し違っていった。教会の縁のものなのだろう、普段着ではなく少し青みがかったローブを着ている。胸元には水の女神ヘステイアの聖印が刺繍されており、ときおり木漏れ日に照らされ黄金色の輝き放っている。

少年は木陰にあお向けになりながらぼんやりと流れる雲を目で追っていた。

やがてその雲は木の枝にさえぎられ見えなくなる。すると一つため息をつき、すぐ横においてある、古ぼけた一枚の封筒に手を伸ばした。

もう、何度読み返したのだろう。

大切にしているのだろうけど、封筒はこすれてしまっただぼろぼろになってしまっている。差出人はエレノア＝ルートシルト、年に何回か商売のため立ち寄る行商の同年の女の子からだった。いつのころからか仲良くなり、今でもこうして手紙のやり取りでお互いのことを話せるかけがえのない友達だ。

少年にとってエレノアからの手紙は、なんの情報も変化もない退屈な村の中で、身近に外の世界を知ることのできることで、楽しみだった。

森の中で出会った妖精の話、湖のほとりにある旧文化の遺跡にまつわる伝承や物話、色々

な出来事がとても楽しそうに書いてあった。

エレノアからの手紙を読むたびに少年はいつか自分もエレノアのように色々なもの、果てなく広がる世界を見てみたいと思いを募らせるのだった。

しかし、今回の手紙に書かれていたことはそれだけではなかった。文の最後にこう書かれていた。

「…今年の祭りには間に合うかも知れません。」と。しかし、今日がその祭り当日だった。今朝になってもエレノア達、行商の一行は着いてはいなかった。

「探したぞ、ノエル。またここにきてたのか。」

ノエルと呼ばれた少年は、後ろのほうからよく聞きなれた声に呼ばれる。

ノエルは寝たまま、首だけで振り返るとそこにはノエルと同年代の友達のクウォールが柵の上に肘をつけて訝しげな表情でノエルを見下ろしていた。

短めの茶色い髪、淡い萌黄の普段着を着ている。同い年といってもノエルよりも背が高く、落ち着いた雰囲気は幾分大人っぽく見える。

「なんだ。クウォールか。」

予想通りの人物にノエルは寝たの体勢のままやる気なく返事をした。その様子を見て、つまらなそうにクウォールは言葉を返す。

「なんだじゃないだろ、まったく。教父様が探してたぞ。」

「じいちゃんか？ やべっ。」

慌てて起き上がって足元の手紙を拾う。その様子を見て、クウォールが一つため息をしてノエルに訊ねる。

「まったく。今日日本番なんだろ。大丈夫なのかよ。そんな調子で。」

「なんとかなるよ。ずっと前から練習してたんだから。」

柵を飛び越えながら不機嫌にそう答えるノエルを見てクウォールは思わず笑う。

「なんだよ、一体。気持ち悪いな。」

じろっとクウォールをにらむ。そんなノエルの様子を気にせず、からかうようにクウォールは答える。

「いや、わかり易いやつだなっと思っとな。手紙の彼女がこないとやるきでないんだなっつて。」

「!? おまえっ、人の手紙盗み読みしたなあっ！」

手紙を見てノエルが反論しようとしたときクウォールはもう逃げて森のほうまで行ってしまった。

「広場に置き忘れたったおまえが悪いんだろ。むしろ家に届けてやったんだから感謝しろよ。」

そういいながら森の中に消えていく。それに続いてノエルも走ってクウォールの後を追いかけていった。二人の去った崖は今までの騒ぎがあったことがまるで嘘だったようにいつも通りの静けさを取り戻していた。晴れ渡った空は青さを増し、やさしい風が崖を静かに包み込んでいた。

ノエル達は小さい頃から幾度となく訪れた馴染みの森を親友と遊びながら村へと向かって駆け下りていく。

ここは村の裏にある山、ノエル達はよくこの山に入って狩をしたり、山菜を採ったりして生活している。だからノエル達は道らしい道があるわけではないのだが、よほど奥へ行かないかぎり迷うことはない。

もともとノエル達の住むウエスタ近辺の森には人を襲うほど凶暴な動物も殆どいなければ、惑わすような迷惑な妖精もあまり出ることはない。

森の中は色々な動物や虫の鳴き声や羽の音など色々な生き物の音が聞こえてくる。

とはいっても不気味な印象は感じられない。森から降り注ぐ柔らかな木漏れ日はいつものように優しくノエル達を包み込む。

駆け下りていくと森に住むウサギや小鳥達はノエル達の話し声を聞いて隠れていく。ノエル達はいつものように、にぎやかな森の雰囲気を楽しみながらクウォールとともに森の中を駆け抜けて行った。

1

ノエルの住むウエスタは由緒ある精霊の聖域なのだが、巡礼の時意外はほとんど訪問者などが来ることもない山間にある静かで小さな村。

16歳になったノエルにとっては何の変化もなく新しい情報入らない村は、平和で何一つ不自由なことはないのだが、それが故に退屈で物足りなさを感じていた。

しかしそんなウエスタの村はいつものどかな様子とは打って変わってにぎやかに村人

達は祭りの準備に取り掛かっている。
 ヴァンタンジュとは恵みをもたらす大地、そして先駆者、ヘステイアに感謝の気持ちをこめて感謝の気持ちを表すこと、そして来年の豊穡を願って行われる年に一度の祭りだ。
 この日、祭りが行われる理由は水の精霊様の生まれ変われとされるリマドフォーマにある。

毬藻とよく似た生物なのだが詳しいことはいまだ解明されてはおらず、ラトゥールの中では今のところウエスタにしか生息していない。

もう一つは水を浄化するといわれているリマドフォーマはこの日の晩、やわらかい緑色の光を発することに理由がある。

「おおつ、ノエル、きまつてるんでねえか。そうやって見ると後継らしく見えるもんだな。」

村に戻ってきたノエルを見て村のおじさんが冗談混じりに話し掛ける。

「見えるって、ちゃんと今までもやってますってば。」

「はっはっは、そうだったか、そりゃ失礼。夜楽しみにしてるからな、がんばれよ。」

そう言い残し、軽く手を振るとまた慌しく祭りの準備を進めている。少し不満そうなノエルを見てクウォールも思わず笑う。

「何だよ、お前まで。」

「いや、こいつがいつかは教父様のようになるのかなって思ってたさ。」

「悪かったね、こんなんぞ。」

ふてくされるノエルはクウォールになだめられながら、二人は村の中央にある広場の近くまでやってきた。

祭りの会場となる広場はいつもの落ち着いた様子とは変わり、にぎやかな収穫祭に彩られている。

この日のために装飾を施された家の壁や表通りに続く様々な露店、そしてなにより目を引くものは村の中心にあるヘステイアの女神像の立つ噴水。その四方には大人の背の2倍はある大きな燭台がもうけられていた。

「へえ…。すごいな。これ完成したんだな。」

三本の丸太を組み合わせ、その上に同じように組み合わせた丸太を結んで造られた巨大な燭台だ。

見上げるノエルを横目に誇らしげにクウォールは燭台に手をかける。今日の晩、儀式の時にこの上にリマドフォーマを奉るための物だ。

「ああ、後は精霊様を乗せるだけ。すごいだろ、これ。これとむこうの二つは俺と父さんで作ったんだぜ。」

「これ、二人で作ったの？ それはすごいな。さすが大工だな、お前ん家。」

ノエルの言葉にクウォールは少し照れた笑いを浮かべる、そして自分で作った燭代を見上げてノエルに話しかける。

「俺、父さんの仕事継ぐ気だから少しずつでもやってかないとな。」

兄弟に男、俺一人しかないし、父さんもう年だしと冗談交じりの言葉を運ぶ、ノエルも笑いながら言葉を返したり、茶化したりしながら少しのあいだ話し合った。

「じゃあ、そろそろじいちゃんのところ行かないと怒られるから。」

もりあがり始めた会話を切り上げるためノエルがいう。

クウォールもそうだなとうなずき二人はまたなと軽く手を振って互いに別々の方向に歩き出す。

「こっちは準備したんだから、へましないでしっかり決めろよ。」

クウォールが歩いていくノエルに最後に一言、友達らしい応援の言葉をかける。ノエルは振り返らず手を上げて返事をし教会へ向けて歩き出した。

ウエスタの中央通りを奥まで行くとノエルの家でもある教会につく。

村の中でもっとも大きい建物になる教会は白い壁に統一され、上にはヘステイアの聖印が掲げられている。

装飾の施された大きな扉前でノエルは自分の服を手で払い、おそろおそろ教会の扉を開く。

すると重厚な扉の奥から数人の話し声が聞こえる、どうやらノエルを待っている間に誰かが相談をしにきたのだろう。

話の邪魔をしないようノエルは静かに礼拝堂に入り、静かに扉を閉めた。

白い煉瓦で造られた礼拝堂の中はひんやりとした空気があたりを包む。整然と並べられた長椅子の奥にヘステイアの像が立つ祭壇がある。

そこに天窓から差す光が祭壇を照らし、あたかもヘステイア像が自ら輝いているような神秘的な印象を受ける。

中には三人の男の人達が祭壇のところで何か大切な話をしていた。

その中の一人が神父でもあるノエルの祖父、ジョセフの姿があった。

ノエルと同じようなヘステイアのローブを身に纏い、白髪で顎に長いひげをこしらえて

いる。

話によると名高い教父なのだが、ノエルにとっては何処にでもいる普通の頑固なおじいちゃんではない。

話の内容を聞いてみると、おそらく今日の祭りの打ち合わせをしているのであろう。仕方なく話が終わるまで待っていると、ノエルの様子を見て奥のほうから近づいてくる女性がいる。ノエルの母であるクレアだ。

肩まである黒髪で落ち着いた佇まいの女性、今はローブではなく朱色の入った普段着を着ている。

「おかえりなさい、おじい様が心配してたわよ。今日の神楽はちゃんとできるのかって。」
落ち着いた口調で話しかけながら、クレアはノエルの様子をうかがう。

「大丈夫だって、ずっと前から練習してきたんだから…。」

「ほら、後ろ向きなさい。草原に横にでもなってたんでしょ、せつかくのローブにしわよ寄っちゃってるでしょ。」

そう言うノエルの言葉をさえぎってクレアはノエルのローブを手直しする。

「初めて神楽をするノエルの聖衣姿、お父さんにも見せてあげたいわね。」

「いいよ、別にそんなこと。」

父親の話をされて、ふいっと横を向く。そして、ノエルはすこし間を置いてからクレアに訊ねた。

「…ねえ、父さんからぜんぜん連絡こないの？」

ノエルの質問に少し困ったような口調で、首をひねってクレアは答えた。

「そうなのよねえ…。最近なんにも連絡してこないのよね、よっぽど忙しいのかしら、祭りの季節なんだから手紙の一つでもよこしてくればいいのに。はい、もういいわよ。」

そう言ってクレアはノエルの背中をぽんとたたく。振り向いたノエルに笑顔でがんばりなさいと一言応援する。それに少し照れた様子でノエルは小さく返事をかえした。

「やっともどってきおったか。」

どうやら向こうでの話し合いは区切りがついたらしく、じいちゃんがノエル達のほうへ話しかける。

話をしていた人たちも一礼して教会を出て行った。

「今日が本番じゃぞ、神楽はただ行えばいいものではない。大地の恵みをくださったへスティア様、そして精霊様へ感謝の気持ちを込めて村の代表としてお前がするんだぞ。」

「わかってるって。心配要らないよ、ずっと前から練習してきたんだから。」

「しかしのう。なんか最近気持ちの上の空なことが多いからのう。今のお前は真剣味がた

らん。そんなことでは精霊様に感謝の心が伝わらんど。」

そんな中、教会の扉が開く。宿屋の主人が訪れたのだ。

「教父様、今お時間よろしかったですか？」

中の様子を伺いながら主人は恐る恐る話し掛ける。ジョセフもむきなおして訊ねる。

「ええ、どうなさいました？」

「はい、少し前に行商の方が村にきましたのでその報告に……」

「本当に？ おじさんっ！」

その報告におもわずノエルが口を出す。

「ああ、ついさっきな。今頃、宿の前で積荷を下ろしているんじゃないかな。」

ノエルの勢いに驚きながらも宿屋の主人は答える。それを聞いてノエルは外へ向けて走り出した。

「おい、ノエルっ！ まだ話はおわっておらんぞ。」

「ごめん、じいちゃん。続きは後で。」

ジョセフの呼び止めにノエルは扉のところで待ちきれない様子で答え、そのまま言い終わるや否や走り出してしまった。

外は眩しかった日が傾き始め、あたりは夕闇に包まれ始めていた。祭りの準備を終えた広場を走り抜け、ノエルは宿屋の見えるところまでノエルはたどり着いた。

いろいろな話し声が聞こえてくる。宿屋の主人が言った通り行商の一行が着ているらしく、宿屋の前は多くの人でごったがいでいた。

ノエルは人の隙間を縫って前に進む。前の視界が開けていく。宿屋の前に馬車が大きな荷台を引いて止まっていた。行商の人が何人か慌しく荷降ろしをしている。

そこに遠くに住む幼馴染がいるかあたりを見渡す。しかし宿屋の中に行ってしまったているのか行商の人が見つからない。そうしているうちに、聞きなれた声で聞きなれた名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「おーい、エレノア。その荷物中に運んでおいてくれ。」

「はーい、やっどくね。」

返事の声がした方にノエルは視線を向ける。馬車の陰から両手に荷物をいっぱい抱えた女の子が出てきた。

朱色のコートを羽織り、束ねられた長い髪は夕日によって黄金色に輝く。ときおり風が優しく包み、その少女の髪をなびかせている。荷卸の最中なのだろう、額にはうっすらと汗がにじんでいる。

ノエルは鼓動が早くなつていくのを感じている。思わず体を前に乗り出す。仕事に気をとられているためまだ向こうはノエルのことに気が付いていないようだった。

少し迷いながらも声をかけようと口を開こうとしたその時だった。いきなり下から大きな茶色い物がノエルに覆い被さってきた。

「っうあ！」

不意の出来事に思わず尻餅をつく。驚いているノエルに生暖かいものが頬を撫でる。

大きい犬に乗っかられて舌で舐められていることにやっと気が付く。犬の顔を引き離す。

「ア、アルフ？」

ノエルに乗ったままアルフはノエルのほうをじっと見ている。体から降ろし、頭を撫でてやりながらノエルは体勢を立て直す。

「こらあつ、アルフ！ だめでしょ！」

少女もこのことに気が付いて荷物を降ろしてノエル達のほうへ駆けつける。近づいて初めてノエルだということに気が付く。

「ノエル：。」

突然の再会に言葉を失うエレノア。ノエルも立ち上がったてエレノアの方を向く。

「うん。久しぶり、エレノア。」

ノエルもなんとか再会の言葉を交わす。しかし、お互い会って話したいことは山ほどあったはずなのに何一つ言葉が出てこない。見詰め合ったまま、沈黙の時間が流れる。

「背、のびたんだね…。」

最初に言葉を出したのはエレノアだった。少し照れたように小さな声で言葉を続ける。

「前会ったときはまだ同じぐらいだったのね。もうだいぶ離されちゃったな。」

微笑みながらエレノアはそう言った。ノエルも笑いながらそうだねと答えた。

「前会ってから一年以上たつもんなあ。それ言ったらアルフはもつと大きくなったよ。さつきはびっくりしたよ、いきなり飛び掛ってきたもんだから。」

「ふふ、そうよね。この前着たときはぜんぜんちっちゃかったもんね。今じゃこんなに大きくなっちゃってね。」

エレノアはアルフの頭を撫でながら笑って答える。それから二人はさっきまでの沈黙が嘘のように止め処なく言葉が出てくる、エレノアはあの手紙からの出来事を面白おかしくはなし、ノエルもその話に答え自分の話も織り交ぜお互い笑いあった。

そして、一段落したところでノエルが静かに切り出す。

「よかった。祭りに間に合ったんだね、もうこないのかと思った。」

「うん、心配かけてごめんね。あたしも無理かもと思ったけれどお父さんに無理言つて間

に合わせてもらっちゃった。」

いたずらっぽく笑って答える。しかしノエルは今日、祭りに間に合った理由が偶然ではなくエレノア達の苦労があつてということを知り、胸が痛くなつた。エレノアに言葉を返そうとしたその時、不意に遠くから話し掛けられた。

「おおい、エレノア。まだかあーっ。」

親方からだ。はつとした様子でエレノアは急いで返事をし、荷物を拾いなおす。

また後でねっとノエルが話を切り上げると、エレノアはごめんねとノエルに小さく頭をさげる。さつき降ろした荷物を両手に抱え、宿屋の中へ走っていった。アルフもエレノアの後を追ってついでに行く。

ノエルはその様子を見送って後ろを向く。教会に戻ろうとした時、宿の窓からエレノアがノエルに向かって大きな声で声援を送った。

「ノエルーっ、神楽がんばってねえー。絶対観にいくからね。」

エレノアは窓から乗り出して大きく手を振って見送る。

応援にノエルは右手を上げて答える、そして教会へと走り出した。その表情はさつきまでの曇った顔つきは何処にも見当たらなかった。

日が沈み、ウエスタの村に夜が訪れる。

満天の星空の中、光を落とした村を満ちた大きな月があたりをやわらかく照らす。人々は広場に集まり宴の始まりを静かに待ちわびている。

広場の四方にある全ての燭台にはすでに精霊様が設けられている。それはあたかも翡翠玉のように淡い青緑色の光を放ち、あたりを幻想的な様子へと包み込む。

そこにローブを纏い、神妙な趣のノエルがゆっくりと噴水のほうへ歩いてくる。右手には麦の穂を、左手には神酒を持っている。

ヘステイアの像と向かい合い一度小さく礼をし、人々の方へと向き直る。その様子を見て村人の一人がリュートを奏で始める。

みんなが見守る中、ノエルは左手に持っていたを神酒を掲げ、奏でられる民謡に合わせて豊穡の詩を読み始めた。

読み終えたノエルは再び像の方へと向き直る。そして持っていた穂と神酒をヘステイア

へと捧げ、ふかく一礼した。
それを合図にウエスタの収穫祭が始まった。

ウエスタの村がにぎやかに動き出す。通りにある露店で甘いお菓子をねだる子供達、楽しそうに杯をかわし合う人たち、村は今までの苦勞から開放されたかのようにこの時を楽しむ。

ノエルは一度家に帰り、儀式用のローブから普段着に着替えなおす。そしてじいちゃんとの神樂の反省を手早く済ませ、再び中央の広場へと戻ってきた。

精霊様の柔らかな光に彩られた広場はさつきまでの静謐な様子とは打って変わって陽気な音楽があたりを包み、至る所から笑い声が聞こえてくる。あたりを見回すがエレノアの姿は見当たらない。広場を一回りしてみようと歩き出した時、聞き覚えのある豪快な笑い声がノエルの耳に飛び込んできた。目を向けると簡易的に造られた酒場でエレノアのおじさんと同僚らしい人が酒を交わしていた。

「おじさん、ひさしぶりです。」

「おおうっ、ノエルウツ。久しぶりだなあ。元気だったか？」

祭りが始まって間もないのにすでにお酒の空き瓶がテーブルに並んでいる。すでに出て上がっているらしくキニアの親方は赤い顔をしている。

ノエルの顔を見てにんまりと笑って肩のあたりをバンバン叩きながら語りだした。

「いやあ、さつき、かつこよかったぞ。立派になったもんだわ。はっはっはっ。どんだん父ちゃんに似てきたなあ。神樂やってる姿なんかそっくりだったぞ。」

「ああ、どうも…。あの、エレノアは？」

そう聞かれて親方はぐるうっとあたりを見回す。

「そこにいるのそーでねえか？」

キニアが指を指すほうにノエルは視線を送るがエレノアの姿は見当たらない。そこには行商の同僚らしい人がいるだけだった。

「ああ、あいつはアルドかあ。髪長いから見まちがえちまった。あっはっは。」

どこをどうみれば小柄な自分の娘と小麦色に焼けたがっしりした体格の同僚を見まちがえるのだろうかと思ってしまう。

「あー、どこ行ったかなあ。さつきまでいたんだがなあ…。」

どうやら完全に酔っぱらってるらしく、ノエルは苦笑いを浮かべる。このままでは埒があかないとノエルは話を切り出す。

「そうっすか。じゃ、行きますね。」

「おおっ、またあとでな。おじちゃん、酒おごってやるからな。」

そう言っただけで飲み始める。まったく手がかりがつかめないまま、再び一人で探し始める。

結局、一周してみたものの広場のほうにはエレノアの姿はなかった。ノエルはエレノアがいそうなどころを考えていたとき、妹を連れて歩いているクウォールと出会った。

「おつかれ。なかなか様になってたぞ。」

笑いながらクウォールはノエルにそう言うと、テレながら言葉を返す。

「ありがと、でも疲れた。終わった後でもじいちゃんに怒られるし。」

「ははっ、大変だな、教会の後継も。もう今日は仕事ないんだろ。彼女、宿屋のほうに居たぞ。早く行ってやれって。」

「宿屋に居たって。わりい、いくわ。」

クウォールに軽く手を振りノエルは宿屋に向かって走り始めた。

露店の並んだにぎやかな中央通を駆け抜けていく。村の入り口に近い宿屋に近づくにつれ人氣が少なくなっていく。

少し息を切らしながらノエルは宿屋までたどり着いた。殆どの人が祭りに行っているのだらう、あたりはひっそりと静まり返っている。

村唯一のこの宿屋は教会ほどではないが、木造二階建ての大きな建物だ。客室になっている二階のほうに目を向けてみたが、灯りの点いている部屋はどこにもない。

本当にこんなところにエレノアは着ているのかと、クウォールの言っていたことを疑う。半信半疑に宿屋の正面の方へと向かう。すると入り口のほうから話し声が聞こえた。

宿屋の正面に出る。そこに入り口でしゃがみこんでいるエレノアがいた。

人の気配を感じしやがんだ体勢のままエレノアは振り返る。そこにいるのがノエルだと気が付いて立ち上がって向きなおした。

「おつかれさま、ノエル。かっこよかったよ。教父らしいことしてるノエル見たの初めてだったから驚いちゃった。」

微笑みながらそう答えるエレノア。それを聞いてノエルは照れた笑いを浮かべる。

「宿屋戻って何してたの？ まだ仕事あるの？」

ノエルの質問にエレノアは首を横に振る。そして手に持っているものを見せる。そこに

は露店で売られていた干し肉があった。

それをアルフがおいしそうに食べている。

「アルフにお留守番頼んでいたから、お土産あげにきてたの。ノエルまだ忙しそうだったし。」

「そっか、広場におじさんは居たけどエレノア居なかったから探してたんだ。」

「えっ、お父さんに聞いたんじやなかったの？ もおっ、一度宿屋に戻るからっていつておいたのに……。ほどほどにしときなさいって言ってるのに、お酒飲むといつもそうなんだから。」

まるで親方の母親のような発言におもわずノエルは笑ってしまふ。

「行こう、久しぶりのウエスタの収穫祭案内するよ。」

ノエルはすつと笑顔で手を差し出す。その手を取り、うんっ。と笑顔で答えてくれるエレノア。二人は一緒ににぎやかなウエスタの村を歩き出した。

二人はウエスタの収穫祭を楽しそうに見て回る。露店で飲み物を買ったり、木の実で作られた首飾りをエレノアは試着してノエルに見せてみたりと、思い思いにこの貴重な時間を楽しんでいた。

そして二人は広場を抜け、町外れの川の方へやってきた。なんでも今頃、村に昔から伝わる『成人の儀』が行われている頃だと、ノエルがエレノアに持ちかけたのだ。エレノアも一度も見たこと無いものだから見てみたいと、嬉しそうにノエルの後をついてきた。

二人はあまり離れないように歩く。村の光もここまでは届かず、あたりは月明かりとノ

エルが手に持つ精霊力物質ヒルで光るカンテラだけで、ぼんやりと道が見える。時折吹く秋風が木々を揺らし、さやさやと奏でる。そんな中、少しずつせせらぎが聞こえてくる。遠くに光が見えてきた。

ノエルの言う通り儀が行われているらしく、橋の袂に何人か火を囲んでいた。

山の方から一人の男の子が目には涙を浮かべながら帰ってきた。その少年は手に持っている青く光る石を見せると、母親に抱きしめられ回りから暖かな拍手と喝采で迎えられている。

「これはどうゆう意味なの？」

あわせて拍手しながらエレノアはノエルの耳元でそつと訊ねる。

「んーとね、ここでは12歳になったらウエスタに住む精霊様に認めてもらうため一人で

供え物を持って、山の中にある酒蔵まで行くんだ。」

「酒蔵？」

エレノアが不思議そうに聞き返す。

「そう、酒蔵。本当のお酒を造ってるわけじゃないんだけど、そう呼ぶんだ。さっき、儀式で持ってた水が神酒といって、そこに住む精霊の力がその水に宿っているらしい。そして、その神酒が湧き出る地底の泉が酒蔵なんだってさ。」

ノエルの話聞いて、エレノアは少し納得したような顔をした。そして、再びノエルに質問を切り出した。

「ノエルはその酒蔵に入ったことあるの？」

その質問に、ノエルは首を横に振って答えた。

「いや、奥まで入れるのは、神父のじいちゃんだけ。俺も『成人の儀』の時に入り口見たいところで証を受け取って戻ってきたことしかないんだ。」

そう行つてノエルはつけていた首飾りをエレノアに差し出す。

「そっかあ。じゃあ、あの子が手に持ってたものが証なんだ。」

「うん、そう。これのこと。」

エレノアはノエルの首飾りの石をまじまじと見つめる。

「きれい…。」

淡い青の入った水晶の珠。酒蔵内でしか採れないことから精霊石とも呼ばれているとても貴重なものだという。

「ねえ、ノエルはちゃんとできたの？」

「そりゃあ…。まあね…。」

「ほんとに？」

クスクス笑いながらエレノアが追求する。それに「できたよ。」と言い張るノエルにふいに後ろから人影が現れた。

「女の前だからって嘘ついちゃあいけねえなあ！ おおっ。」

振り返るとノエルと同じ年ぐらいの男が三人並んで立っていた。村の三馬鹿トリオ、通称出っ歯のギー、デブのブー、爆発頭のタツカだ。でも村の中ではなぜか真面目なクウォールの方が仲がいいのに、馬鹿四人組扱いされることのあるのがノエルにとって妙に切ない。こういうときに最も会いたくない連中に見つかってがっくり肩を落とすノエルにブーが言葉を続ける。

「話を聞いてたらかっこよくいやがって。」

「聞くなよっ！ どっか、いけって！」

ノエルに的確な反撃をされてもブーは話をやめようとしな。にやにやしながらおかまいなしに言葉を続ける。

「おまえ、儀式のとき酒蔵に居た自分のじいちゃんおばけと勘違いして泣いて引き返してきただろ。」

嘩然として話を聞くエレノア、それに対して顔を赤くしたノエルは反撃にうつてでる。「そう言うお前なんかお供え物途中で食っていたろ！」

痛いところを突かれてたじろぐ、ブー。その会話を聞いてどっちもどっちだとギーが大笑いをしている。

「うるさいっ！ 川から流れて帰ってきたやつに、笑われる筋合いはないっ！」

会話の矛先がいつせいにギーに向く。思わずカタの後ろに隠れる。

「前から言いたかったけどなんなんだよ、その髪型はっ！」

カタまで巻き込まれ、五十歩百歩の壮絶な言い合いに膨らむ。しかし、その輪の中に入る事ができないエレノアは加熱する言い争いをただ眺めていた。そして寂しそうにうつむく。

そして数分。

「…グスツ。」

「…悪かったって、ちょっと言い過ぎたよ。だから泣くなって…。」

冷静に戻ったノエルがタツカを慰める。話の後半、集中攻撃した結果、カタが泣き出してしまったのだ。

「お前が、『タツカの頭に精霊様のつけてるみてーだぞ。』なんて言うからだろ。」

「それを言ったらお前だって『なら今日、祭りなんだから、ちゃんと光れよ。』とか言ってただろ。」

ノエルとブーがまだ小声で言い争いを続けている。完璧にいじけているタツカを見て、この気まずい場を何とかしようとノエルがブーに話を振る。

「いや、その、なんだ、まあ個性的だよなあ。なあ。」

「お、おう。そうだよ、かっこいいって。だから泣くなっ。」

微妙にフォローになっっていないような言葉でカタを慰める。そうしているうちに村のほうを見ていたギーが話題を振る。

「村のほうで出店がなんか面白いもの出したみたいだよ。そっち行ってみない？」

「おっ、そうなのか？ よし、それじゃあ気い取り直してカタ行くべ。じゃあなノエル。」

あわててブーもその話に乗る。タツカの肩に手を回してまた三人で歩いて行く。その様子をさっさと行けと言わんばかりに、あからさまにいやそうな顔で手をひらひらさせて送るノエル。

まるで嵐が去ったように川のほとりに元の静けさが戻る。

「ふう…。あっ、ごめんね。変なやつらが急に来てさ。」

「ううん、そんなことないよ、楽しい人たちだったね。いつもノエルあの人達とはなしているよと楽しそうだよね。」

「そおかな…。」

ノエルは腕を組んで考え込む。

楽しそうだよつと、首を縦に振ってエレノアは笑顔で答える。しかしその表情にはどこか寂しさが残る。

「…どうかした？」

「えっ、いや、なんでもないよ…。あっ、儀式終わったみたいだね…。」

奥の方からは今日、精霊様に認められた子供を連れて笑いながら村の人たちが帰っている。子供の手には受け取った精霊石が大事に握られていた。

その様子をエレノアは少し悲しげな表情で静かに見送っていた。憂鬱になっているエレ

ノアの様子を見てうまく言葉をかけられないノエルは少し考え込む。何か閃いたのかエレノアに話し掛けた。

「そおだつ。エレノアに見せたいものがあつたんだ。」

いきなりのノエルの言葉にエレノアは少し戸惑いながらノエルの顔を見て聞き返す。

「見せたい…物？」

「うん。ちよつと遠いけど一緒に来てくれる？」

にんまりと笑ってノエルが言う。きよとんとした顔でエレノアはノエルの言葉に頷いた。

3

「ねえ、ノエル…。どこまで行くの？」

少し不安そうにエレノアがたずねる。

「もう少しで着くからさ。もうちよつと待って。」

ランタンを片手にノエルは笑顔でそう応える。

今、二人はノエルの持つランタンの光を頼りに森の中を歩いている。

村の祭りの喧騒もここまでは届くことはなく、昼間とは打って変わって静かな森はひんやりとした空気があたりを包み、時折聞こえる物音が不気味に感じる。

ノエルは目的地までの目印を見落とさないようあたりに目を配りながらゆっくり坂を登る。その後ろをエレノアがついて歩く。

森の中に入ってから二人の間隔が少しづつ狭まっていく。行商の仕事上夜中歩くことは慣れていないエレノアだが、行き先がわからないことが不安な気持ちにさせた。

前を歩くノエルの服をつまむ。少し驚いたノエルはふと振り返る。

「ごめんなさい…。なんだか心細くって…。」

エレノアは小さな声そうで応える。その表情はノエルが知っている明るい印象とはちがいで、とても繊細で弱々しくさえ感じた。

「あつ、ごめん。」

今まで見た事のないエレノアの様子にあせってノエルも返事する。それからしばらくの間、何も話すことなくその状態のまま二人は坂を登っていた。

「さつき墓地の横とか通ったもんね、そりゃ不気味だよね。」

なかなか話す話題がみつからないノエルにエレノアが静かに話しかける。

「さつきと違ってすごい静かだからちよつと怖くなったの。それにいつもアルフと一緒に

いてくれたから。なんか、ちよつと心細いの…。」

服をつかむ力が少し強くなったように感じる。

「でもこれから行く場所、いつかは見せてあげたかったんだけど、今日見たら絶対きれいだからさ。もう少しがんばろ。」

坂に気をつけて登りながら楽しそうに話すノエル。その表情を見て少し安心できたのか、エレノアの表情に自然と笑顔がほころぶ。そしてノエルの言葉に一つ頷いた。

「あつ、着いたよ。あの柵の向こうなんだ。」

ノエルがエレノアの顔を見ながら、柵を指さす。そこまでたどり着いたノエルは勢いよく柵を飛び越える。ノエルに気をかけてもらいながらエレノアも慎重に柵を超える。少し歩くと周りの世界が開けた。

「わあ、きれい。」

思わずエレノアは崖の先端の方へと駆け出し、周りに広がる世界を見渡す。

暗い森を抜けてエレノアが見たものは果てなく広がる空一面の星空、そして祭りの光が村中に広がり色とりどり光が浮かぶ。何より中央の広場が淡い緑色の光に包まれ、とても温かく幻想的な世界が眼下に広がる。

ノエルは崖の先端のほうで見とれているエレノアの横に並び顔を覗いてみる。

楽しそうに眼窩に広がる世界に見とれているエレノアを見てほっとしたようなかおを見せた。

「よかった、喜んでもらえて。ここは最近俺がみつけたんだ。」

「うん。すごいきれいだ。」

エレノアの笑顔に照れた笑いを浮かべるノエル。少し冷たい風が通り過ぎるこの場所で二人はしばらくの間寄り添うようにただ目の前に広がる世界を眺めていた。

いつしか座って眺めていたノエルが口を開く。

「俺、エレノアがうらやましいな。いろんな所行って、きれいな物とか不思議な物たくさん見れて。この村って何もないから。」

そうノエルに言われ、さびしそうにエレノアはうつむいてしまう。そして消えてしまいうような小さな声で、押し殺していた気持ちを言葉に紡ぎ始める。

「そんなことないよ。私はノエルがうらやましいな。昔からの友達とか居場所があつて……。」

「あいつらのこと？ そんないいもんじゃないって。単なる腐れ縁だよ。」

そう言うノエルの言葉に首を横に振る。夜の闇の中に輝くウェスタの村を見つめながらエレノアは少しずつ言葉を続ける。

「小さい頃からずっと旅の生活だから私には子供の頃の話で笑い合える友達がないもの。」

エシエゾーにはお家あるけど殆ど帰らないし。……だから私、この村が好きなの。ノエルみたいな友達もいて、回りも温かくて、なんか本当に自分の故郷に帰ってきたみたいで。うまく言葉のかけられないノエルはただ、エレノアの話聞いていた。

「ごめんなさい。こんなこと言うつもりじゃなかったのに。どうしちゃったんだろ。」

語尾はかすかに震えていた。エレノアは膝の上に組んだ腕の中に顔を伏せている。

エレノアの言葉を聞いてしばらく考え込むノエル、そして何かを決意したように小さく、よじっと呟いた。

「じゃあ、そろそろ行こうか。遅くなったけどまだ間に合うはずだから。」

立ち上がって体をほぐしながらノエルがエレノアに呼びかける。

「えっ、どこへ？」

ノエルの顔を見上げながらエレノアは聞き返す。

「エレノアの故郷をつくりにさ。」

笑ってノエルはこう応えた。

二人は再び闇に包まれた森の中を進む、しかしそれは村に帰るためではない。ノエルと一緒に酒蔵へ行こうと切り出したのだ。

この日、ウエスタでは年に一度の『成人の儀』が行われた。年齢は過ぎているがエレノアも認めてもらいに行こうと言ったのだ。

「いいよ、ノエル。危ないよ。それに後できつと怒られちゃうよ。」

エレノアがノエルの後を追いながら心配そうに話し掛ける。

「大丈夫だって、それにここからそんなに遠くないはずなんだ。」

エレノアの忠告も聞かず前に進んでいく。とは言うもののノエル自身もこの山には幾度となく来ているが、酒蔵には行くことはない。ましてや、立ち入り禁止とされている場所だけに、森の中を通過して行った事など一度もありはしなかった。

ランタンの光を頼りに足場に注意しながら慎重に進める。

しかしそれは随分前に行ったかすかな記憶と憶測でしかない。なれた山だと甘く考えていたノエル達は目的地になかなかたどり着くことができず、闇に閉ざされた森の中を彷徨っていた。

「大丈夫？ ノエル…。もう随分歩いてるけど…。」

心配そうにエレノアが話し掛ける。その声を聞いてノエルは足を止めてあたりをぐるっと見渡した。

「おかしいなあ…。もうそろそろ川が見えてきてもいいはずなんだけど…。」

訝しげな表情でノエルは空を見上げる。しかし、あたりは深い森に包まれ月さえ見ることとはできない。

「大丈夫だよ。山を下れば村はあるんだし、それにおそらく近くまで来てるはずだからもう少し行ってみようよ。」

ノエルの言葉を聞いても不安をぬぐいきれないエレノアはノエルを止めようとした、そのときノエルが悲鳴を漏らした。

「うあっ！」

濡れた落ち葉に足をとられたノエルは体勢を崩し、そのまま坂を落ちてしまった。

「ちよっと、大丈夫？ ノエル！ 怪我してない？」

上のほうからエレノアがノエルに呼びかける。

「…ってえ、落ちたのか…。かっこわるいなあ。」

うつ伏せになって倒れていたノエルは何とか立ち上がってエレノアに言葉を返す。体のあちこちに痛みはあるものの、幸い大怪我はしていないようだ。

ノエルからの返答を聞いてとエレノアはノエルの滑り落ちた坂をゆつくりと降りてきた。

「きやつ！」

木にしがみ付きながら何とかノエルのところまで降りてきた。そして、すぐさまノエル

の元へと駆け寄る。

「ほんとに怪我不い？ …もお、心配したんだから…。」

暗闇の中、今にも泣きそうな顔でエレノアがノエルの顔を見つめる。それをみて頭を掻きながらノエルはごめんと一言応える。

ノエルはあたりに落としてしまったランタンを探す。どうやら落ちたときの衝撃で火が消えてしまったらしく、闇の中を手探りしている。

「あっ、あった。…よっと。」

ノブをひねって再び点火しなおす。やわらかい白黄色の光に包まれあたりは、今滑り落ちてきた坂のほうを照らし出す。かなり急斜面だったことがこうして見てはつきりわかる。

「これは…、登れないよなあ…。」

ノエルが思わず口に出す。よくエレノアは降りてこられたなと考えてしまうほど坂切り立っていた。

二人して坂を見上げたが、登れそうなどころは見当たらない。

「ねえ、ノエル。川の方向がわかればそこまで行けるの？」

途方にくれているノエルにエレノアが話し掛ける。

「えっ、うん。そうだけど…。」

「そっかあ、ちよっと待ってて。」

そう言うエレノアは一本の木に目星をつけて歩き出す。そしてその木に近づくとそつと手を当て、まるで友達に話し掛けるように木に向かって語りかけた。

何をしているのかわからないノエルは不思議そうにその様子を見ていた。やがて、エレノアが笑顔でノエルのほうへ向き直る。

「川のある方向わかったよ。もう少しで着くみたいだよ。」

そう言う川のある方向を指差す。行こうと呼びかけ、今度はエレノアの先導でノエル達は再び森の中を歩き出した。

「ねえ、さっき木に向かって何してたの？」

歩きながらノエルがエレノアにたずねる。するとエレノアは少し恥ずかしそうに小さな声で話し始めた。

「さっきはびっくりしたしよ、いきなり木に向かって話し掛けてるから。私、ほんの少し

だけ精霊術クラフトできるの。」

前を歩いていたノエルが振り返る。

「さっきのが精霊術だったの？ すげー、使ってるどころ初めて見た。いつからできたの？ ほかにどんなことできるの？」

ノエルは矢継ぎ早にエレノアに質問する。その勢いにたじろぎながらもエレノアはゆつくりとノエルの問いに応えていく。

「うーん、いつからだろ…。習ったわけでもないんだけど、旅してて気がついたら伝わってくるようになってたの。できることは今みたいに川とかの場所がわかったり、あと天気が少しだけ予測できるくらいかな。」

歩きながら感心するノエルに、たいしたことできないよ、と笑って返すエレノア。そんなこと無いよと言ってくれるノエルに、エレノアは照れながらありがとうといった。

そして、少し間を置くとエレノアはすつと遠くを見つめ言葉を続けた。

「私ね、いつかフェアリードクターになりたいんだ。精霊術のこと勉強して旅で出会った病気で苦しんでいる人とかに役立てたいと思ってるの。」

フェアリードクターとは万物に存在すると言われている精霊力物質の助力をえて様々な

精霊術を扱う人々の呼び名。属性を見極め、薬を調合し、病気の治癒や怪我の治療を行う

者もいれば、逆にそれを呪いの為に使う者もいる。ノエル達の世界の中で人々の生活に深く関わり尊敬され、また畏怖される存在でもあった。

「へえ、すごいなエレノアは。俺はまだぜんぜんわからないんだよな、そーゆーの。じい

ちゃんもフェアリードクターなんだけど、精霊術使ってるどころ見たことないんだよなあ。」

ノエルが少し残念そうに話すとエレノアが横に並んで微笑みながら話し掛けた。

「ノエルのおじいちゃん、教父様だもんね、いつかノエルも勉強しないとね。」

いたずらっぽく言うエレノアの言葉にノエルは少し考え込む。そして、今までとは違う少し真剣な口調で話始める。

「教会を継ぐことはいやじゃないんだけど、ただ、教会の息子だからって何も知らないまま継ぎたくないんだ。その前にエレノアみたいに外の世界でいろんな物を見たり、自分ができることを探してみたいなあ…。」

「ノエル…。」

うまく声をかけられないエレノアは心配そうにノエルを見つめる。

「まあ、父さんのこともあるからじいちゃんはやんは絶対許してくれないだろうけどね。」

エレノアの様子を気にしてか、話をはぐらかすように笑いながらノエルは言葉をつけた。そのとき、前方の木々のむこうからかすかに違う音が聞こえてきた。それは聞き覚えのある音、村を横切る溪流が奏でる力強い音だ。

二人はその音に向かって光をかざし歩いていく。

「滝の音だっ！ 川まで出られたんだ。」

ノエルがうれしそうに話し掛ける。それにエレノアも応えるように大きく頷いた。

ノエル達は酒蔵へと続く山道へ戻ってきた。さっきまでブー達と話をしていた場所からさらに登ったところにある、滝の横側に出てきたようだった。

儀式の終わった山道に人影はなく、あたりはノエル達を残していつもの静かな姿を取り戻していた。

「そっか、ここに繋がってたんだ。たしか、あの滝の上に酒蔵があるんだ。行こう、エレノア。」

ノエルは滝の上を指差しながらエレノアに伝える。エレノアはノエルの指差す方を見上げる、それからまた視線をノエルに戻し、微笑みながら返事をした。

二人は月明かりの下、暗い山道に足元を注意しながら滝の上へと続く階段を登っていった。滝ノ上にたどり着いたノエルは、少しあたりを警戒するように周りの様子を伺う。暗くて見通しが利かないが、滝の上は少し開けた場所になっていて溪流が流れているのがわかる。そのほりに明かりの灯る小屋がある。

「だれか住んでるの？」

その小屋を警戒するノエルの様子を見ていたエレノアが小声でノエルに話しかける。

「あそこの小屋にガンドンって言う酒蔵守のおっちゃんが住んでるんだ。できればあんまりあいたくないからさ。ちよっと待ってて。」

そう言いながら身をかがめて静かにガンドンの住む小屋へと近づく。そして光の洩れる窓からこっそりと中の様子をうかがう。小屋の中にあることを確認すると手でエレノアにこつちに来るように合図をする。

なんとかガンドンに気づかれることなく小屋を越えることができた二人の前に酒蔵の入り口が見えた。

森の奥、高くそびえ立つ山の岩壁に社を設けられた洞窟がある。その中から村へと続く溪流が途絶えることなく流れている。そこに開いた洞窟が酒蔵への入り口であり、その奥深くには今でも精霊様が住むと言い伝えられている。

近づいて見る酒蔵の洞窟はノエルの倍もある高さで予想以上に広い。数十年もの時間の重さを感じさせる門をかたどった社の奥に、洞窟の中を流れる川の横に小さな道がある。聖地と呼ばれるだけあって、あたりは今まで歩いてきた山道にはない静謐さと凜とした空気があたりを包む。

社の前まで来た二人は軽く礼をして、ランタンの光を頼りに洞窟の中へと入っていった。

水の流れる音の中に二人の足音が響く。洞窟の中は川の横を通る一本道で少し坂になっている。二人は寄り添うように間隔をあけず、ひんやりとした洞窟内の道を登っていく。

「もう少しで小さな祭壇があるんだ。そこまで行って儀式で首飾りをじいちゃんに貰って村へ戻るんだ。」

「そうなんだ。もうすぐ、酒蔵の入り口なんだ。」

悪いことをしている意識はあるのだろうか、今のノエルの説明に少しほっとしたようにエレノアが言葉を返す。

「うん。：エレノアは精霊って本当に見たことがある？」

ノエルは歩きながら、

「私？ ううん、私も見たこと無いよ。妖精ならあるけど。」

そっかあと残念そうにノエルは返事する。そして、ゆっくりと話し始めた。

「俺、教会の息子だからこんなこと言っちゃいけないだろうけど：。よく信仰なんかで出てくる精霊って、ほんとにいるのかなあって。」

エレノアも返答に困り、少し考え込む。たしかに、万物を司る者と伝えられているものの、精霊を見たと言う話は聞いたことが無い。

それは伝承や信仰の中だけの存在と言われても否定できないものだったから。

「私も見たことは無いけど、精霊はいるって信じたいな。私が勉強している精霊術クラフトは誰かを助けたいと願う時に精霊が力を貸してくれるものだと思ってるから。」

エレノアの言葉にノエルは微笑みながら、そうだねと応えた。

話しながら歩く二人は曲がり角にさしかかる。ノエルがそれを見て声をあげる。

「あつ、着いたよエレノア。そこを曲がったらすぐ祭壇があるんだ。」

ノエルの言葉にうれしそうに返事するエレノア。二人は角を曲がろうとするその時だっ

た。

「こらあつ！ おめえらつ！ なにしてる！」

いきなりの大きな怒鳴り声に二人の動きが止まる。後ろを振り向くとランタンを片手にがっしりとした体格の男が歩いてきた。

お互いの顔がわかる位置まで歩いてきた。洞窟の手前にある小屋の中にいた酒蔵守のガンドンだ。ノエルの顔を見るとガンドンは顎一面に生えたひげを片手で触りながらしがれた低い声で話しかけてきた。

「おめえ、ノエルでねえか。神父様の孫がこんなところでナニやってんだ。ここに入ったやいけねえことは神父様から聞いてるんだろ。」

うつむきながらノエルはしぼり出すように小声で応える。

「…はい、聞いてます。」

「なら、何で入ってきてるんだ？ こらつ！ さつさと出てけつ！ 神父様に言いつけるぞっ！」

腕をつかまれ、引きずり出されるように外へ追い出されるノエルをあわててエレノアも追いかける。その時、まるで何かに呼び止められたようにエレノアは祭壇の方へ振り返る。

そして、なにか遠くの何かを見ているように立ち止まってしまった。

「こらあつ！ おめえもなにしてる！ 突っ立ってねえで早くこっちに来いっ！」

「えっ、あつ！ ごめんなさい。」

我に返ったようにエレノアは慌てて返事をして出口に向かって走り出した。

にぎやかだったウエスタの収穫祭も終わりが近づいているのだろう、村は少しづつ熱をさましていた。盛況だった露店も片付けを始め、はしゃいでいた子供達の声もすでにない。

皆、それぞれの家に帰り、いまごろは遊びつかれて深く眠りについているのだろう。

今、村は広場に設けられた即席の酒場に大人たちは集まり、静かに語りながら酒を飲み交わしていた。

ノエル達も酒蔵から村へ帰ってきた。下りの帰り道、エレノアがうつむいてしまい、ほとんど会話もしないまま村の中へ戻ってきてしまったのだ。気まずい空気の中、広場を過ぎてエレノアが泊まっている宿屋の近くまで二人は歩いてきた。

ノエルはエレノアにかける言葉も見つからず、今日のことを謝って別れを切り出そうとした時、エレノアがノエルの名を呼んだ。

「ノエル…。ごめんなさい…。私のせいで怒られるようなことさせちゃって…。ごめんなさい…。」

今にも泣き出しそうな小さな声でノエルに謝る。

「いやっ、そんな…。こっちこそごめん。俺のかつてな行動でそっちまで気分悪くさせちゃって…。」

慌ててノエルもエレノアに謝る。しかしエレノアはまだ顔を上げることなく、未だうつむいてしまっている。

「ごめん…。ただ、エレノアに故郷をつくってあげたいと思ってさ…。」

間を取り直してノエルは再び謝る。そして、エレノアに話し掛けながら自分の身に付けている首飾りはずす。

うつむいているエレノアの手を取り、その手の上にノエルは自分の手を重ねた。

「受け取ってほしいんだ…。ほんとは祭壇の前であげたかったんだけど、渡す隙なかったから…。」

エレノアは手のひらを見てみると、そこには青い精霊石の首飾りが柔らかく輝いていた。

「えっ、でもこれ、ノエルの…。」

顔を上げてエレノアはノエルの顔を見る。ノエルはにっこりと笑ってエレノアに話しかける。

「いいんだ。俺の方は、無くしたとか適当に理由つけておくから。そんなことより、おめ

でどう。これでエレノアもウエスタの一員だよ。最後まで儀式できなかつたけど、きっと精霊様もエレノアのこと認めてくれたよ。」

ノエルの言葉を聞いたエレノアは視線を落とし、その手の中にある小さな証を見つめる。

「…エレノア？ 迷惑だった？」

首飾りを見つめたまま、動かないエレノアの様子にノエルは心配そうに話しかける。

「違うの、ノエル。すごく嬉しいよ。なにおかしいの、私…。なんでうれしいのに涙でてくるんだろ…。」

袖で涙を拭いながら笑って見せる。

「ありがとう…。ノエル、ありがとう…。」

いつもの明るい表情に戻ったエレノアを見て、自然とノエルにも笑顔がほころぶ。二人は今日の出来事を笑い話に変えながら少しの間、久しぶりに笑いあった。

「もう、今日は随分遅くなったからそろそろ帰るね。」

「うん、そだね。また明日ね。おやすみ、ノエル。」

手を振りながら宿屋の方へ帰っていくエレノアをノエルは笑顔で見送る。宿屋の扉に手かけてエレノアが「おやすみ。」と小さく手を振る。ノエルも手を振ってかえすとエレノアは宿の中へと入っていった。

静まり返った宿屋の前、少しづつ冷え込み始めた夜空の下、一人残ったノエルは空を見上げる。そして、ノエルの家でもある教会に向けて歩き始めた。しかし、その表情は家に帰るためではなく、硬い決意と意思を感じさせるものだった。

4

少し開いたカーテンの隙間から太陽の光が窓から差し込む。秋晴れの真っ青な空の中、太陽はほぼ真上の位置にまで昇っていた。

ときおり聞こえてくるのは、祭りの後片付けをする男達の声とはしゃぐ子供達の笑い声ぐらいで、祭りを終えたウエスタの村は普段の落ち着きを取り戻していた。

随分前に目は覚めているのだがノエルは未だベッドから出ずにいた。

もうだいぶ時間がたっていることもわかっている。しかし、起きる気分にはなれずにいた。横になりながら右頬に手を触れる。痛みはもう無いものの、その時の感触は今でも覚えていた。それを思い出すたび、またベッドの中へ潜ってしまうのだった。

それは昨日、エレノアと別れてからの事だった。

夜遅く、ノエルは教会へと帰ってきた。深く深呼吸して扉に手をかける、静かに礼拝堂への扉を開ける。すると、中にはジョセフの他にもう一人、男の人がいる。

「今帰ってきたのかい。お帰り、ノエル。」

エレノアの父であるキニアだ。

「おじさん、めずらしいね、こんな時間にきてるなんて。」

「ああ、酔いも覚めてしまつてね、夜分遅く申し訳ないが教父様に少々グチを聞いてもらつてたんだ。」

心なしかいつもの迫力が感じられない。

「じゃあ、私はもう失礼するかな。では…。」

ジョセフに向きなおして一礼する、その様子を見てジョセフもキニアに頭を下げる。そのままキニアは扉の外へと出て行った。

柔らかい蝋燭の光が灯る静かな礼拝堂に二人が残される。重苦しい空気が包み込む。

「遅いぞ、ノエル。いくら祭りだからといって夜中まで遊び歩くんじゃない。」

ジョセフはノエルを見ると静かに言う、仕事の続きを始める。

「うん。ごめん、じいちゃん…。」

ノエルは小さな声で謝るとその場で立ち止まる。しばし沈黙の時間が流れる。

意を決したノエルは手を握り締め、ジョセフに話しかけた。

「じいちゃん、話があるんだ…。俺…。一度、村出てみたいんだ…。」
ジョセフの動きが止まる。

「…なにを言っておるんだ、ノエル。」
立ち上がってノエルのほうを向く。

「教会を継ぐことがいやだとか、そんなんじゃないんだ。ただ、外の世界に出てもつといろんな物を見てみたいんだ。」

ノエルの言葉を聞いてジョセフは小さくため息をつく。

「お前みたいな子供が外に出て、一体どうやって生きていく。できるわけ無かろう。」

「でも…、エレノアはもう自分にできることや、なりたいものを見つけてるんだ。」

「知識を求めるのは感心だが外に出るのは、お前にはまだ早い。今日はもう遅い、もう寝るんだ。」

「何でそんなに頭ごなしに言うんだよ…。そんな言い方だから父さんもでていったんだろ。」

教会内に乾いた音が響く。振り向きざまにジョセフの手がノエルの右頬を打ったのだ。そのまま何を言うことも無くジョセフは立ち去ってしまった…。

一晩過ぎた今でもノエルははっきりと覚えていた。いままで叩かれることは何度もあったが、あんなに怒ったジョセフの姿は見たことは無かったから。そして、何よりも叩かれた後の、寂しそうな目も…。

ノエルの父親であるロランがウエスタから姿を消したのはおよそ3年ほど前の話になる。

教父としてお勤めの中で、信仰とフェアリードクターだけが扱える精霊術クラフトに頼るだけの

今の状況に憤りを感じ、「誰にでも扱える精霊術クラフト」を創り上げるため村を離れたのだとノエルはクレアから聞いていた。

出て行く前にジョセフとどんなやりとりがあったかはノエルは知らない。しかし、それ以来ジョセフからロランの名が出ることは無く、ノエル達もジョセフの前で父の話題を振らないことは暗黙の了解になっていた。

今まで心の中に貯めてたものもあつたのだろう。勢いとはいえ、言ってしまった言葉をノエルは少し後悔していた。しかし、それでも外の世界を見てみたいという気持ちは消えることは無かった。

ドアを叩く音が聞こえる。動揺しながらもノエルは起き上がって返事をした。
「母さんだけど、入っていい？」

ノエルの返事を聞いて、鍵の無いドアを開ける。ゆっくりとクレアが入ってきた。
「こんな時間までカーテン閉めちゃって。」

窓に近づくとカーテンを開ける。眩しいほどの太陽の光が部屋いっぱい広がる。
「もう昼よ。いい天気なのにいつまで寝てるの…。」

話し掛けてもノエルは言葉を返さず、黙ったまま下を向いている。

「…おじい様に聞いたわよ、急に旅に出たいなんてねえ…。」

ベッドの上に座っているノエルの横に座る。まだ顔を上げないノエルに優しく話しかける。
「おじい様はノエルのことをウエスタに閉じ込めようとしているわけじゃないのよ。ただ心配なだけなのよ。」

「私はほとんど村から出たことは無いんだけど、ノエルは男の子だからきつとこういう日が来ることはおじい様もわかっているのよ。」
ノエルは下を向いたまま、小声で話し出す。

「…でも、家を出た父さんのこと、じいちゃんは嫌ってるから…。」

クレアは少しだけ困ったような顔をしたが、優しくノエルに語りかけた。

「そんなことないのよ。ノエルは知らないかもしれないけど、おじい様はお父さんのことを今でもちゃんと見ているのよ。毎年、祭りの季節になるとエレノアちゃんのお父さんに頼んでお神酒を届けてもらってたんだから…。」

「そうなの？」

ノエルがクレアの顔を見つめる。ノエルの言葉にクレアは微笑んで頷いた。

「ええ、頑固だから言ったりしないけど。」

「母さんは…、父さんと一緒になったこと後悔とかしてないの？」

ノエルは少しためらいながらもクレアに訊ねた。するとクレアは微笑みながらはっきりと応えた。

「ええ、後悔なんてしたこと無いわよ。そういう人だとわかって一緒にあったのは私のほうなんだから…。」

「母さん…。俺も父さんみたいに外に出て、いろんな物を見てみたい。母さんはどう思う？」
「そおねえ…。行くことは反対しないけど、一人で行かせるのはちよつと心配かな。おじい様なら何か良い方法考えてくれるんじゃない。」

母の言葉を聞いて、ノエルは真剣に考え込む。そして、意を決するとベッドから飛び降

り、急いで寝巻きから、普段着に着替え始めた。

「もう一度、じいちゃんに話してみる。」

「はいはい、でも行く前にちゃんと顔洗ってから行きなさいよ。おじい様、外出なさっているから。」

「えっ、どこへ？」

ノエルがシャツの袖に通しながらクレアに訊ねた。

「おそらく、キニアさんのところじゃないかしら。話があるって言っていたから。」

「エレノアのおじいさんに？ わかった、行ってくるね。」

急いで着替え終わると、そう行つて部屋を飛び出した。慌しく階段を下りる音が聞こえる。部屋に残されたクレアはすつとベッドから立ち上がり、出て行ったノエルを見て思いにふける。

「やっぱり親子よね……。会っていなくてもこんなに似てくるなんて……。」

微笑みながら、そう呟くと、クレアもまたノエルの部屋を後にするのだった。

昼近くになって飛び出した村は、もういつもどおりの姿に戻りつつあった。

昨日まで並んでいた露店はきれいに片付けられており、中央広場に立てられた大きな燭

台も撤去作業が行われていた。その中の一人にクウォールの姿も会った。

自分が手がけた燭台の上に登り、木と木を結んでいる紐を解いているようだった。走ってくるノエルに気がついて、片手を挙げる。ノエルも手を挙げ、軽く挨拶を交わしながら宿屋のほうへと走っていった。通りを抜け、ノエルは宿屋の前までやってきた。

息を整えて両開きの木の扉をゆっくり開ける。カランカランと扉につけていた小さな鐘が店の主人に来客者を告げる。

中に入ると、少しひんやりとした空気と、木で作られた建物独特の柔らかい明るさがあり、中に入ると、少しひんやりとした空気と、木で作られた建物独特の柔らかい明るさがあり、おいたりを包み込む。

それなりの広さのあるホールの奥に喫茶があり、ちょうど昼時ということもあり、おいしそうな香りが室内を包む。

ノエルの目の前にあるカウンターには誰もいなかった。

「いらっしやーい、ってノエルか。どうした？ 何か用事か？」

喫茶から髭を生やした店の主人が出てきた。

「こんにちは。あの、うちのじいちゃん着てませんか？」

「ああ、教父様かい？ 行商のキニアさんのとこに会いに来てるよ。さつきお茶をお持ちしたんだが、なにやら難しい話してるみたいだった……。」「

つけていたエプロンはずし、片手に持ち直しながら主人はそうノエルに告げた。
 「そうですか…。」
 そう言って考え込むノエルに主人が話しかける。
 「急な用事か？ なら、部屋の番号教えるが…。」
 「あっ、いや、そこまではいいです。少しここで待たせてもらってかまわないですか？」
 「それはかまわんよ、開いてる席に座ってな。そおだ、まだ飯食ってなかったら食べてくか？ 昨日、なかなか様になってたからおごってやるぞ。」
 主人のお誘いに、ノエルは両手を振って丁重にお断りをした。そして、客室に続く階段の見える角の席について、降りてくるのを待つことにした。

もう何十分待ったのだろう。周りにいた人達は昼御飯をすませ、いつしか喫茶にはノエル一人になっていた。ノエルはテーブルに肘をつけてぼんやりと階段の方を見ていた。すると、聞きなれた声が聞こえてきた。ジョセフとキニアが降りてきたようだ。

ノエルは立ち上がって階段の方へ向かった。
 ノエルが姿をあらわすとキニアは軽く挨拶をした。しかし、ジョセフは無言のまま、ノエルの目を見た。ノエルもまた、ジョセフのじつと目を見ていた。

ノエルがしゃべりだそうとした時、ジョセフは右手を上げて、それを制した。
 「ここで話すようなことではない、外へ出てからだ。」
 そう言うと、宿の主人に礼を言っ、キニアと共に外へと出て行った。ノエルもジョセフ達の後を無言で行った。

何も話さないまま、ノエルは黙々と二人の後を付いて歩いた。中央の通りを歩き、ジョセフ達は中央広場まで来て歩くのをやめた。

昨日、ノエルが神楽を行ったあたりを眺めながら、後ろにいるノエルに話を切り出した。

「ノエル、昨日言ったことは本気か？」

「本気だよ…。だから、今もこうして話にきてる…。」

ノエルは手を強く握りながら、はつきりとそう応えた。

「外で金もなく、どうやって生きていく。」

「誰かに雇ってもらおう…。」

「もし、どこも雇ってくれぬとき、どうする？」

「狩でもしてやっていくさっ！」

「たわけがっ！ そんなことで生きていけるわけなからう…。」

厳しい口調でジョセフが言いながら、ノエルの方へ向き直る。

「ノエル、お前は世の中をまだ何も知らん。まだ、学ぶべきものはたくさんあるはずだ。」
ノエルは下を向いて、力いっぱい手を握り締めている。きつと言いつ返せない悔しさと、無力な自分に憤りを感じているのだらう……。その様子を見ながら、ジョセフはなおも言葉が続けた。しかしその口調はさっきとは変わって穏やかな話し方だった。

「昨日、おまえは神楽を行い、信仰に対する意識が少しはましになったのではないかと、わしは思っておる。旅に出すわけにはいかんが、お前には色々なことを学ぶために、次の修行をしてもらう……。」

下を向いたまま、ノエルは無言でジョセフの言うことを聞いている。

「キニアの親方の行商を手伝いながら、ロランへ届け物をしてほしい。」

今の言葉に、赤い目をしたノエルが顔を挙げる。

「じいちゃん……、それって……。」

「一人旅は許さん。だが、頼れるものと一緒に仕事を行いながら、世界を見て歩くことは、いい勉強になると想っておる。あいにく、わしは村を離れるわけにいかんから、変わりに

キニアの親方とロランの様子を見てきてほしい。」

「じいちゃん！　ありがとっ！」

言い終るや否や、嬉しさのあまり、ノエルがじいちゃんに抱きつく。少々戸惑いながらジョセフは浮かれているノエルに注意をする。

「これっ、わかっておるのか？　途中で帰ってはこれんぞ。」

「わかってるって、やったあっ！」

ジョセフの言葉にも気持ちちは落ち着かず、ノエルは声をあげて喜んだ。

そこに、にっこり笑ってキニアが手を差し出した。

「これからの道中、よろしくな。」

その手を取ってノエルは元氣よく返事をした。

「はい、よろしくおねがいます！」

その様子を見てジョセフは優しく微笑んでいた。

しかしその目はどこか、悲しさを浮かべていた……。

それからの一日、ノエルの周りでは大騒ぎだった。

後で知ったエレノアは涙を浮かべて大喜びし、もうほとんど眠っている父のキニアを捕まえて夜中過ぎまで話していたらしい。クウォール等の男友達もこの話にはひどく驚き、ブーは俺もついていくと、むちゃくちゃなことを言い出す始末で、大騒ぎしながらも、周りの友達に説得されていた。

そしてノエルが家に帰って真っ先にクレアに話した。するとクレアは、だから言ったでしよつと言い、微笑みながらノエルの頭を撫でてあげた。

夜、ベッドに入ってもその日の興奮が冷めず、ノエルは眠れぬ夜を過ごした。

次の日から二日間、出発までの短い日数のなかで、ノエルはエレノアと共に旅に行くための準備を行った。大体のものは揃っていたが、足りないものはエレノアのアドバイスを聞いて買いつたりもした。その他にも、旅に出る上での大切な知識や技術を教えてもらい、あつという間に過ぎていった。

そして出発当日。その日も見渡すかぎりの青空が広がっていた。

教会の一室、ノエルがクレアと共に旅に出る準備をすすめていた。

厚めの紺色長袖の上に、右肩のところにシヤストアの聖印が刺繍された、白い巡礼用のコートを上から羽織る。そしてその上に太い皮のベルトを少しゆるめに巻き、もう一本の細いベルトを肩に回してずり落ちないように固定した。太いベルトには三つの小さなポシェットと、後ろには護身用に愛用のリューセック（前側はナタ、後ろ向きにすると斧として使える採取用の小刀）を鞘に入れた状態で取り付けた。

それをノエルは右手で容易に抜けるか、何度か試して確認した。

一通りの確認を終え、最低限の荷物を詰めた布袋を持ってノエルは教会を出た。

宿屋の前につくと、エレノア達が馬車のところで積荷が崩れないよう固定しているところだった。

「おはよう、ノエル。どう？　ちゃんと準備できた？」

エレノアが笑顔で出迎える。

そして、ノエルから荷物を引き取ると、おもむろに荷台に乗せる。

「ああ、ばつちり。いよいよ出発かあ…。」
 「うん、そうだよ。ノエルと一緒に旅できるなんて、不思議な感じ。じゃあ、これから先、道中ではよろしくお願いします。」

エレノアが頭を下げ、にっこりと笑う。
 ノエルもつられて頭を下げ、お互い笑いあった。

「おい、ノエル。早速だが、手伝ってもらえるかあ。」
 親方と呼ばれ、ノエルは返事をし、駆けつける。エレノアは再び積荷の整理を続けた。そうして出発の準備は着々と進んだ。

準備が終わる頃、周りには人が集まっていた。ノエルを見送るためにきてくれたのだ。その中にはクウォールやブーたちの姿もあった。

「ノエル、もう出発か？」

クウォールが見計らって話し掛けた。

「ああ、準備も終わり。いつでも出発できるぞ。」

「そうか…、がんばってこいよ。」

「おうっ、一回り大きくなって帰ってきてやる。」

「泣いてすぐ帰ってくんよ、ノエル。」

ブーが冷やかすようなことを言って、割り込んできた。

「…いたのか、ブー…。」

あからさまに、いやそうな顔をしながら、ノエルは横目に見ながらいった。

「て、てめえっ、人がせっかく早起きして見送りに来てやったのに、なんだその態度はっ！」

「こんな時間でどこが早起きだあっ！ それに冷やかしくるぐらいならまだ寝てやがれっ！」

相変わらずの口喧嘩に、クウォールもやれやれといった表情を浮かべている。
 留めに入ろうとした時、思いがけない声が飛び込んできた。

「ノエル、せっかく見送りに着てくれたんだから、そんな言い方しなくてもいいでしょ。」
 エレノアがノエルに注意するように言った。今まで入ることのできなかつた話の輪の中に入ってきたのだ。

それを聞いて、ギーも調子を合わせる。

「そうだよ、せっかく集まったんだからさ。あと、お土産もよろしくな。」

「いいんだって、エレノア。こいつらはこんなもんで。」
 ギーの言葉をとりあえず無視しながらノエルはエレノアに言った。
 そんな話をしていた時に、エレノアが一人の異変に気が付いた。
 「…タツカ、くん？」

みんなが目線をタツカに送る。

なぜか、瞳いっぱい涙をためて、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「た、タツカ？ お前、どおした？」

ノエルが恐る恐る話しかける。

すると、タツカは涙をだらだら流しながら話し出した。

「ノエルウ！ 俺…、俺よおっ！」

「いや、もう十分、お前の気持ちはわかった！ だから何も言うな！」

ノエルが慌ててタツカの言葉を遮る。

もちろん、さっぱりわからない。でも、聞きたくもない。

また、いつものようにギーがタツカをなだめる。そんな様子を見て、みんなでわらいあ

った。エレノアも本当に楽しそうに笑う姿を見て、ノエルは心の底から嬉しく思えた。

「おおーい、そろそろ出発するぞおっ。」

親方の声が聞こえてきた。見ると、親方達は村の入り口のところまで行っていた。

「んじゃ、そろそろ行くわ。」

ノエルは話を区切り、エレノアと共に入り口へと急いだ。

入り口のところにはクレアとジョセフも待っていた。

「ちゃんと親方の言うこと聞くのよ。じゃあ、気をつけてね。」

そう言うとクレアは、みんなで食べてとノエルにパンの入った包みを渡した。

ノエルは受け取ると、わかっているよと返事をした。

そして、ノエルはジョセフを見た。

「いろんなものを見て、いろんな事を感じてくるといい。では、がんばれよ。」

優しくも、厳しい瞳でノエルに言葉少なく、そう言った。

ノエルはその言葉に、真剣な眼差しで強く頷くと、優しく微笑んだ。

それを見届けた親方が、大きな声で旅の始まりを告げた。

「よし、じゃあ、出発するぞ。」
大きな声で返事をし、ノエル達はウエスタの外へと歩き始めた。
がんばれよと村の方から、応援の声が聞こえてくる。
それをノエルは手を振って応えながら前へと進んだ。

『再会』
おわり

著者 さちづる

編集 COHO

仕上 Y.Kumagai